台大日本語文研究第 48 期
2024 年 12 月，頁 1-27
2024-10-09 收稿，2024-11-18 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202412_(48).0001

中村星湖與葛西善藏之爭
—創作與批評之交錯—

王憶雲*

摘要

本論文探討了葛西善藏(1887-1928)的〈星湖氏的月評脫線之處〉（《時事新報》1923 年 1 月）及與此評論相關的言論。報紙、雜誌等媒體經過明治時期的蓬勃發展後，到了大正時期更加普及，評論家對文學作品的批評言論之影響力亦隨之增加。儘管中村星湖(1884-1974)是前輩作家，但葛西善藏對他的批評言論逐漸感到不滿，最終將這種不滿訴諸文字，發表在媒體上。透過本論文的探討，此事件之所以發生，主要是因為日本文壇這種極為特殊的空間裡，評論家經常評論作家的私生活和人格，而評論之著眼點同時包含了對作者與作品的期待。此種情形，與德國評論家堯斯(Hans Robert Jauss)提出之「接受理論」的「預期視域」有相近之處。

經過本論文分析與〈星湖氏的月評脫線之處〉相關的星湖言論後，我們可以看出文學批評對於文本外部事物，亦即作品的流通和評價，擁有相當大的影響力。透過具體之文本探討，本論文試圖提供具有歷史脈絡的觀點，並分析文藝評論在大正時代文學中所扮演的角色。

關鍵詞：中村星湖、葛西善藏、批評、預期視域、媒體

* 國立臺灣大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Dispute Between Nakumura Seiko and Kasai Zenzo: The Intersection of Literary Works and Criticism

Wang, Yi-Yun*

Abstract

This study examines the discourse surrounding *"Seiko's Monthly Review Goes Off the Rails"* (*Jiji Shimpo*, 1923) by Kasai Zenzo (1887-1928). As media became increasingly prevalent during the Taisho era following the Meiji era, the criticism of literary works gained greater significance. Kasai gradually grew dissatisfied with Nakamura Seiko's (1884-1974) critiques, ultimately prompting him to articulate his concerns in writing and publish them in the media. Analyzing this article reveals that disputes like this one often arose because critics frequently referenced the private lives and personalities of writers within the unique context of the literary world. This phenomenon bears resemblance to Hans Robert Jauss's theory of the "horizon of expectation."

In addition, by examining Nakamura Seiko's discourse about *"Seiko's Monthly Review Goes Off the Rails,"* it becomes evident that literary criticism significantly impacted issues beyond the text itself. Analyzing the production and reception of literature reveals that the role and influence of literary criticism were crucial elements in the literary landscape of the Taisho period.

Key words: Nakamura Seiko, Kasai Zenzo, criticism, horizon of expectation, media

* Associate Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

中村星湖と葛西善蔵の争論
—創作と批評の交錯—

王憶雲*

要旨

本稿は葛西善蔵（1887-1928）の「星湖氏の月評脱線ぶり」（『時事新報』1923.1.27-28）を取り上げ、それに関わる言説について考察したものである。新聞や雑誌などのようなメディアは明治期を経て大正時代にさらに普及する。また、それとともに、評論家の作品批評の重要性もさらに高まっていた。葛西善蔵は中村星湖（1884-1974）の批評に対して次第に不満を抱き、ついにそれを文字化しメディアに発表するという行動を取る。このような作家と評論家の応酬は主に、文壇という極めて特殊な空間で、評論家が作家の私生活や人格まで言及することがしばしばあったことから生じたと言える。その中にヤウス（Hans Robert Jauss）の〈期待の地平〉理論を援用できるところがある。

また、葛西の「星湖氏の月評脱線ぶり」と関連する中村星湖の言説を見ていくと、文芸批評がテクストの流通や評価といった外部の事柄に大きな影響を与える力を持っていたことが明らかになる。その上、大正時代の文学において新聞雑誌に見られる文芸時評の役割や影響力が重要な要素であったことがわかる。

キーワード：中村星湖、葛西善蔵、評論、期待の地平、メディア

* 国立台湾大学日本語文学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

中村星湖と葛西善蔵の争論
—創作と批評の交錯—

王憶雲

一、はじめに

日本の近代文学の成立過程において、新聞雑誌の普及は深く関係している。新聞雑誌は活字化された文芸作品が読者の目に触れる機会を増大させるとともに、文学作品そのものをさらに社会的な存在に変えたと言える。それと同時に、テクストの生産者とテクストに評価を与える評論家がメディアを通して討議することも頻繁に見られるようになる。メディアは作者が作品を発表する場であると同時に、評論家が文芸時評を発表する場でもある。そして自らの作品の〈価値〉を擁護しようとする作者の言説を載せる機能も兼ねている。たとえば、森鴎外の「舞姫」(『国民之友』明 23.1）に関する応酬がその初期の例の一つである。石橋忍月の「舞姫」評（『国民之友』明 23.2）に対して鴎外は「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」(『しがらみ草紙』明 23.4）を発表し、忍月の評価に反駁している[1]。ここでは詳細には触れないが、互いの発言の根底には近代個人の覚醒や浪漫主義の限界などの時代的課題が存在している。このように、メディアには文学の対話的性格をさらに際立たせる役割がある。この認識は極めて重要である。テクストの生産者がテクストの外部においても反論を唱えざるを得ないという状況を分析することは、テクストの生産された歴史的文脈やイデオロギーを可視化することでもあると想定してよいだろう。

葛西善蔵（1887-1928）は、大正 12 年 1 月 27 日付の『時事新報』に「星湖氏の月評脱線ぶり」という評論を寄稿している。それは翌

[1] 争点となるのは、主人公の性格と行動にあり、つまり「はたして「舞姫」の主人公太田生が恋愛をすてて功名へとおもむいたことは是か非かという問題 」である。久保田芳太郎「補注（鴎外をめぐる批評）」(川副国基ら編『近代評論集I』角川書店、1972.9）の注 29 と 31、444-445 頁を参照。

臺灣大學圖書館授權使用

28日に跨いで掲載され、中村星湖（1884-1974）の自らの作品に対する時評があまりも「脱線」していると強く異議を唱えた内容となっている。冒頭に「僕はこの二年程の間に、四度星湖氏の月評を受けた。その都度、早稲田文学以来恩義のある先輩星湖氏の言葉として、いゝ意味にもわるい意味にも、自分を鞭打つ気で黙つて来た」と葛西善蔵は書いている[2]。ここには先輩である星湖の評価を気にかける葛西の姿が見られるが、そんな彼が沈黙を破る引き金となったのは、星湖が新年の文芸時評で葛西を「揶揄」したことである。大正時代の代表的な評論家の一人である星湖は、この年の元日より、『読売新聞』に「新年の創作」という時評を寄せており、その連載の中で『新潮』所載の「歳晩」と、『改造』所載の「おせい」に触れている[3]。

この二人の応酬は、テクストの生産者としての葛西善蔵が、メディアという公の場でテクストに批評を加える中村星湖に反駁したものである。ただし、文学史的に論争と呼ぶほどの規模ではなく、一見したところ意見交換に過ぎないようにでもある。ところが、谷崎精二は『放浪の作家　葛西善蔵評伝』（現代社、1955.12）で「葛西の死が日本の文学に於ける一つの時代の終末であ」り、「彼の属した時代のあり方があの様でしかあり得なかった如く、彼の芸術も亦あの様でしかあり得なかった」と述べている[4]。谷崎精二のこの発言を踏まえると、葛西文学の特異さは時代と密接な関係を持つものであり、葛西が星湖の評を「脱線」と難じたことから始まる争論にも時代の文脈が読み取れるであろう。

つまり、「星湖氏の月評脱線ぶり」にまつわる言説は、その時代の文学状況を理解するに役立つものであると考えられる。本稿は星湖

2　本稿における葛西善蔵の作品の引用は津軽書房版『葛西善蔵全集』による。第三巻（1975.6）、82頁。

3　中村星湖「新年の創作」の一回目「一」が掲載されたのは大正12年1月1日付の『読売新聞』であり、葛西善蔵の作品に言及したのは1月17日付の「十二」である。詳しい内容の説明は後述する。また、本稿における星湖作品の引用は全て初出による。

4　谷崎精二は『放浪の作家　葛西善蔵評伝』（現代社、1955.12）。引用は『近代作家研究叢書93　放浪の作家　葛西善蔵評伝』（日本図書センター、1990.3）による。1頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

と葛西の言説を詳細に分析し、それに絡む問題を明らかにする試みである。分析にあたっては、テクストの解読はあえて脇に置き、テクスト外部の言説を実証的に読むことを旨とする。本稿では、星湖と葛西の言説に窺える問題は、大正期のメディアという言説空間におけるテクストの読まれ方や、文学批評とテクスト生成との関係に深く関与していることを明らかにしていきたい。

二、星湖の葛西善蔵評について

さて、「星湖氏の月評脱線ぶり」を書くに至った葛西の状況を確認しよう。前述の「星湖氏の月評脱線ぶり」冒頭には、「僕はこの二年程の間に、四度星湖氏の月評を受けた」とある。葛西のいう「二年程」とは大正 10 年と 11 年を指すが、実際には、星湖が葛西のテクストに与えた批評は大正 9 年まで遡ることができる。葛西が批評を受けた対象は全て小説であり、「暗い部屋にて」(『解放』大 9.10-11)、「仲間」(『野依雑誌』大 10.9)、「本来の面目」(『太陽』大 11.1)、「歳晩」(『新潮』大 12.1)、「おせい」(『改造』大 12.1) の 5 作品である。この時期に葛西は「子をつれて」(『早稲田文学』大 7.3) と同題の単行本『子をつれて』(新潮社、大 8.3) によって文壇で出世を遂げ、雑誌からの執筆依頼も急増した[5]。では、ここから順を追って星湖が与えた批評の内容を見ていき、葛西が不満を抱くに至った理由を考察してみたい。

(一)「暗い部屋にて」の連載中止

まずは星湖の「月評」(『読売新聞』大 9.11.1-10、6 回)[6]である。これは星湖が編輯から小説を批評せよという依頼とともに、「似而非現実主義」についての議論に加わってほしいという注文を受けて書いたものである。実際に同紙ではその少し前より、「似而非現実主義

[5] この時期に葛西善蔵への執筆依頼が増え、善蔵がそれに答えることができないほどだったことは、山本芳明「メディアの中の〈私小説作家〉—葛西善蔵の場合」(『人文』5、2007.3) に詳しい指摘がある。41-42 頁。

[6] それぞれの回に「月評」の題の下に見出しのような副題が付されている。たとえば「一」には「本物が贋物と間違へられる／文壇の混沌状態」とある。

臺灣大學圖書館典藏資訊庫

に囚はれたる現文壇」（大 9.10.20-11.5）という特集の連載が始まっている[7]。この「似而非現実主義」とは、星湖の「月評」にある表現を借りると、「楽屋落ちに類するやうな作者身辺の些事もしくは作者の友人間のゴシプをめつたやたらに書き飛ば」すという傾向のことであり、「それに小説の名を冠らせて、堂々と天下に発表してゐる者」が当時の流行作家や新進作家に多いという。このような状況について、たとえば村松正俊はこの傾向の作品はただの模写で、創造ではないと批判的な態度を取っている[8]。

一方、自然主義運動の登場とともに文学活動を始めた星湖は、小説の題材問題をめぐって幾度も発言してきた手だれの経験者である。そのためか、やや冷めた態度でこの話題に臨んでおり、「すべて材料の関係ではなくて、それを扱ふ人の主観の純、不純、態度の正、不正に懸つてゐる。自明の理である。その自明の理をも繰返して言つてやらなければ程、今日の文壇は混沌としてゐる」とまず断っている。そして星湖が最初引き合いに出した作品は葛西善蔵の「暗い部屋にて」であり、「こんなものによくも小説の銘を打つて編輯者の手に渡したものだと、わたしは驚き呆るゝより外はない」とその出来に難色を示している。それは小説の材料が問題なのではなく、時系列が乱れていること、類似した文句が繰り返されていることから、星湖は「一小説家の覚え書き」程度の完成度の低い作品と断じている。その上で、「名匠が惨憺たる苦心の余になる傑作」と謳った広告

---

7 この特集は 10 月 20 日から 11 月 5 日まで計 15 回連載されており、執筆者は豊島与志雄・中村吉蔵・小川未明・藤森成吉・本間久雄・村松正俊・近松秋江などである。連載の〔一〕に編輯者による趣旨の説明が記されている。「現文壇は未だ自然主義から現実主義への過程にある。処が最近創作界の一傾向として、精神のだらけきつた極めて安易な気持ちで日常の些事を手軽に片付けて臆面もなく放り出すものが尠くない。私たちは今、これを仮りに似而非現実主義、即ち「シード・リアリズム」と名付けて、之に対する文壇諸家の意見を集めてみようと思ふのである。」とある。「シード・リアリズム」は Pseudorealism の訳であると思われるが、西欧で Pseudorealism と呼ばれる傾向は超現実主義や心理分析に影響を受け現実の概念を再定義しようとする表現方法であるという点から判断すると、ここの「似而非現実主義」と明らかにずれがある。

8 村松正俊「似而非現実主義に囚はれたる現文壇」十～十五、計 6 回（『読売新聞』大 9.10.30-11.5）。

臺灣大學學術期刊資料庫

を出した編輯者までも問責している。「わたしがもし編輯者ならこんな原稿を断然拒絶する」と言明している。星湖は「似而非現実主義」の問題との間に一線を引き、文学におけるメディアの重要性を見越した上で、テクストの生産者と、テクストを載せるジャーナリズムの担い手の双方を一蹴している[9]。

しかも、星湖の厳しい叱責を受けて、「暗い部屋にて」は『解放』への連載が打ち切られてしまったらしい。現在、我々が実際に目にする「暗い部屋にて」のテクストは、『解放』第 2 巻第 10 号・11 号の 2 号分である。11 号連載の末尾に「次号完結」との一文があるが、12 号への掲載がなく、未完のままである。葛西は「星湖氏の月評脱線ぶり」で、この件を次のように語っている。

> 〔前略〕編輯者こそ飛んだ迷惑を受けたものだつた、どこの雑誌でも大抵似たやうな広告文を書くのだから特に解放の編輯の落度と云ふ訳ではなかつたのに、社からは、何か編輯者が星湖氏に対して反感を持たれるやうなことをしたのではないかと疑はれるし、世間へだつてまずい話だし、また僕自身何か氏に対して失礼なことでもしたことはないかと編輯者から訊かれる位ゐで、氏の月評に対しては僕は何等弁解の気も起らなかつたが、そんな事情からかなり編輯者に対して恐縮した。〔中略〕文壇生活の汚滓の一杯と思つて、黙つて飲み込んではゐたが、そんなことも幾分手助ったかして、解放と自分と双方の気分がしつくり行かなくなつて続稿が出来なくなつて、未だに尻切りとんぼになつてゐる。星湖氏の月評の恐ろしさを、自分は未だ忘れることが出来ない。

連載の中断という事実を見るだけでも、編輯の決断を覆すほどに評論家星湖の影響力が強かったことが窺える。また、この件の関係者が、作品の出来具合よりも、思わぬところで評論家の不興を買った

[9] 葛西「暗い部屋にて」を取り上げる際に、星湖「月評」(『読売新聞』大 9.11.1-10) は、まずこの作品に対して「所謂似而非現実主義に囚はれた作品と言はれそうな、そしてこれこそはさう言はれても致し方のないやうな」ものであると断っておいている。

臺灣大學學術期刊論文

のではないかという点に懸念を抱いていることも興味深い。結局、編輯者は評論家の価値判断を優先させた。原稿料で生活上の経済問題を辛うじて凌いでいた葛西善蔵が生活の面でも受けた打撃の大きさは想像に難くない。

神谷忠孝はこのエピソードを紹介し、「中村星湖がいうほど、この作品は駄作だったとは思えない」として、「星湖の批評で葛西の可能性はつぶされてしまった」と述べている。また、「当時はまだ、批評方法が確立されておらず、印象批評が主流を占めていた」とも指摘している[10]。確かに、星湖の「暗い部屋にて」への批評は正当なものだったとは言い切れない。ただし、本章の冒頭に述べたように、葛西は星湖の批評を強く意識している。また、「星湖氏の月評脱線ぶり」において、葛西は星湖の批判した点に対して具体的な反論をしてはいない。よって、「暗い部屋にて」評以外にも考察の範囲を広げ、星湖と葛西それぞれの立場や思惑を見る必要があろう。

（二） 星湖の「仲間」評

では、次の月評を見よう。大正 10 年 9 月 30 日から連載された「最近小説界の傾向―特にその職業化に就いて」(『読売新聞』大 10.9.30-10.3、3 回）である。星湖はまず、最近の小説界を俯瞰し、量においても質においても振るわないと述べている。ただ、9 月に読んだ作品の中で面白く感じたものとして、中条（宮本）百合子の「我に叛く」(『太陽』大 10.9）と葛西の「仲間」(『野依雑誌』大 10.9）を挙げる。以下に評価理由に相当する箇所を引用した。

> 生地のままな材料と、作者の恐く無意識に取つたであらう一つの態度とに、真面目に考察するに足る物のあるのを感じたのである。〔中略〕わたしが、生地のままな材料といふのは、『仲間』（これは所謂「私小説」であつた）も、『我に叛く』（これは形式だけは客観的の、「第三人称小説」であつた）も、それぞれ

[10] 神谷忠孝『葛西善蔵論　雪をんなの美学』（響文社、1992.11）69-70 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

の形式は異なつてゐながらも、共に作者自身の告白もしくは記録といふべき種類のやうに推察するからである。

星湖はこの二作の題材を「真面目に考察する」価値のあるものだと指摘する。また、「自分自身の生地に帰らうと努めている」という描写態度に感銘を受けたことも述べている。

星湖のいう「生地」とは、作者の現実的な体験を表すのだとすると、「自分自身の生地に帰らう」とすることとは、自らの体験を再現しようと努力することと捉えられよう。ただこれでは星湖はありのままを描こうという、すでに衰退した日本的自然主義の表面的主張を繰り返したことになってしまう。しかし、星湖自身はこの評論の中で「わたしは、文壇諸家の楽屋話を聞いて喜んでゐるのには、余りに年を取り過ぎてゐるし、自分で言ふとちとへんだが、余りに物を考へ過ぎる側の人間だ」と断っており、創作者の実体験に興味があるのではないと明言している。しかも、星湖は葛西善蔵にも中条百合子にも「多少取繕つた芸術を作つてゐたのに慊くなつて」いるという傾向を読み取っている。以上のことから、ここの「生地」とは、作品に通底する表現意欲のことであり、作家それぞれが本来持つ素質であると理解してよかろう。「商売人らしい衒気や技巧が無くて、素人らしい生一本な気持ちでひた押し押してゐる」という、この二人の作家への星湖の評価も、以上の理解で説明がつく。

だが、それだけではない。この評価と同時に、「今の日本の小説は余りに玄人臭い、商売人臭い、それは余りに職業的に、従つて器械的に、殆んど何等の感激もなしに、一般市場の物資と同じやうに需要供給の経済的原理から割り出されたやうな物が多い」という彼の現状認識が記されている。経済原理にまで及んだ発言をするのは、星湖に限ったものではない。田中純は「文壇の現状を論ず」(『太陽』大 8.12) で当時の文壇に見られる問題を次のように指摘している。

文壇に於ける悪コンマアシヤリズムの台頭は、文壇に対する商人の大きい投資に始まる。〔中略〕この二三年の間にどれだけ沢山な、同じ種類の雑誌が出たか知れない。而も、どの雑誌も

臺灣大學學術期刊資料庫

どの雑誌も殆ど同じ体裁、同じ顔ぶれ、同じ広告によつて、その創作欄を売り物にしたのであつた。而も、創作家の数や能力には限りがあるから、勢い不足勝ちな創作家の数をおぎなふべく、無暗に新作家が製造せられ、それに誇大な広告書きが付けられて、市場に出されると云ふ結果になる。[11]

第一次世界大戦がもたらした好景気によって商業主義化の進む文壇の現状を田中純は描出している[12]。これは星湖が「最近小説界の傾向―特にその職業化に就いて」において最も紙幅を費やした批判と重なる指摘である。星湖の指摘を以下に示す。

小説を売つて芸娼妓を買ひそれで材料を拵へてまた一と儲けするか、他人の原稿を安く買ひ込んでそれを書き直して高く売付けるとか言つたやうな、驚くべき小説の職業化が、流行児と目されて居る青年作家の間に激しいと云ふ事である。さう云ふ事実はわたしは直接には知らないが、小説界沈滞堕落（全部とは言はないが、大半と言つて置かう）の最も憂ふべき傾向は此辺から起つて来るのではないか？

若い世代の作家に、小説の素材をあえて金銭で購入し、それを作品に仕上げて売ろうとするという向きがあったという。作品の商品化にともない、小説家も単なる〈職業〉の一種、すなわち生活の営みになっていたのである。中堅作家としての星湖はこのような状況を「沈滞堕落」として注意を促しているのである。

星湖は小説を書くことだけで暮らしが成り立つ時代に登場した作家ではない。星湖自身も繰り返し投稿し、賞を受け、出世作と目されるものを世に送り、小説家として認められるというように、一歩ずつ地道に文壇での地位を固めてきたのである。文学への矜持を持っている。星湖は、葛西と中条百合子の作品に「可なり信用の出来

[11] 田中純「文壇の現状を論ず」（『太陽』大 8.12）、99 頁。
[12] 藤井淑禎「大衆文学の成立―通俗小説の動向として」（筒井清忠編『大正史講義【文化篇】』筑摩書房、2021.8）も田中純のこの評論に注目して、大衆雑誌ブームを論じている。ただし、藤井氏は田中純の指摘した問題は通俗小説においたことであると見ている。300-301 頁。

臺灣大學圖書館 版權所有

る誠実がある」と述べている。小説家に〈誠実〉な姿勢を求めるこの発言は、大量生産を厭わない若い世代に警鐘を鳴らさねばならないという星湖の意図が反映されているのである。

それでは、なぜ葛西はこれらの評論を非難として読んだのであろうか。それはおそらく星湖が葛西文学における題材の問題に触れた箇所と関連すると思われる。

> 葛西氏のそれ〔実生活〕に就てはわたしは可なり立入つた事を言つてもよい程聞き知り見知りしてゐるので、『仲間』を読んでゐると、全く、小説を読んでゐるやうな気持でなくて、その後のかれの身の上の、いくらか世間態を装ふ手加減はあらうとも、打ち明け話を聞くやうな気がした。

星湖は楽屋話に特に興味がないと述べるが、葛西が属した『奇蹟』の同人の大部分が早稲田出身の人々であり、星湖は葛西のことを直接的にも間接的にも見知っていた。そのため、星湖は作品の批評に作者の情報を持ち出してしまう。葛西善蔵という作家に対するイメージは星湖一人の力によって生成しうるものではない。しかし、星湖のこのような批評によって葛西は〈打ち明け話〉しか書かない、書けないという予備知識を読者に与えてしまったと言えるのである。

（三）星湖の「本来の面目」評

次に取り上げるのは、文芸時評の「生麦より」(『読売新聞』大11.1.3-24、11回）である。この題は星湖が生麦に在住していたことによる[13]。この年の『改造』新年号を飾ったのは、かの名高い有島武郎の「宣言一つ」であった。その影響を受けた星湖は階級芸術から論を始め、二葉亭四迷がかつて文壇に投げかけた「芸術は男子一生の事業とするに足るか」という疑問に結び付けて、有島の懐疑の底には四迷と通じるものがあるとしている。このように星湖は有島武郎の主張を、芸術と生活との関係を論じる試みの一つとして捉える。

[13] 紅野敏郎編「中村星湖年譜」(『精選中村星湖集』早稲田大学出版部、1998.11）では大正4年4月に「神奈川県鶴見在生麦に転居」とある。また、大正6年8月に「生麦竜禅寺下より生麦岸杉山神社下に移る」とある。関東大震災後、大正13年に東京杉並区井荻町に移るまでに星湖は生麦に住んでいた。

臺灣大學日本語文學系

連載の 3 回分を有島論への意見に割いたのち、各雑誌の正月号に所載された作品への批評を始める。そして、葛西善蔵の作品への批評は〔十〕（大 11.1.21）にある。

> 葛西善蔵氏の『本来の面目』（太陽）は一時のあわたゞしい、不検束な書き方から脱して、この作者が余程おつとり落ち着いて来た事を思はせる。相変らずの「私小説」で、貧乏と病気とその上に紛紛たる酒気とを売り物にしてゐるやうな、とぼけ返つた図々しさはあるが、こゝが『善蔵本来の面目』だらう？万人に通するやうな『本来の面目』も、その内に書いて貰ひたいものである。〔下線は筆者による、以下同様〕

この当時は〈私小説〉という固有名詞が多く使われ始める時期であった。星湖も早くこの名称を使い始めた一人である。ただし、当時においては、ある作品が〈私小説〉と見做されることがすなわちその出来の良し悪しを決定づけるわけではなかった。「本来の面目」についても、葛西にまつわる人物や事件を題材としているのにも関わらず、「本来の面目」の小説としての価値を否定してはいない。さらに、「万人に通するやうな『本来の面目』も、その内に書いて貰ひたい」という葛西への期待も記している。その期待はより普遍的な何かを書くべきではあるまいかという漠然としたものではあるが、この星湖の葛西に対する期待については本稿の四章で詳しく論じる。

また、「生麦より」も、それぞれの作品に批評を加えるだけで終わるものではない。有島の階級芸術論を下敷きとした星湖の観察が論の全体を貫いている。その論旨は主に〔六〕（大 11.1.16）にある。芸術界における影響力をもつ評論家は創作者を支配する階級であり、「智識階級」の人々であったとする。労働階級の台頭で「智識階級」が不要になるとともに、創作者の独立性も強まると星湖は指摘する。このような支配・被支配の図式が崩れ、「文壇の月評といふ物に権威もなくな」ると星湖は言う。星湖は月評の権威性はメディアを通して読者の手に届いてから生成するものであるとよく理解していたのである。そして自らもそのような言説を生産する一人として、時代

臺灣大學學術期刊資料庫

の変化を俯瞰していた。創作が批評よりも高次な生産活動であると見なす傾向は、労働・生産への関心の強まりと軌を一にすると言えよう[14]。

（四）星湖の「歳晩」評と「おせい」評

「新年の創作」（『読売新聞』大 12.1.1-21、14 回）は各雑誌の大正 12 年新年号の掲載作品に対する星湖の月評である。星湖は冒頭で文壇に対する新年の期待として「階級芸術」と「郷土芸術」の傑作の出現を挙げる。階級芸術と郷土芸術への探求はまさしく前年の文壇を賑わした話題であった。星湖は議論するだけでなく実作に批評を加えたいとしつつ、その望みがかなうことはないだろうとも述べている。このような心情を吐露したのち各作品の批評に移る。〔十二〕（大 12.1.17）に葛西の作品への次のような批評がある。

> 葛西善蔵氏の『歳晩』（同前〔『新潮』を指す〕）をも『おせい』（改造）をも読んだ。どちらも極めて短かい作者自らの身の上話で、貧乏と病気とをひどくこぼしてゐるやうであつて、その実、そんな事からすつかり超越してゐるやうでもある。何の面白味もないやうな事柄でも、この作者の筆に上ると、一種の愛嬌を伴つて来る。不思議な才能といふべきであらう。／刻苦して、一と月かかつてやつと十枚書いたとか、二十枚書いたとかいふ苦心談だけを聞く人は、この作者の芸術的良心にすつかり惚れ込んでしまふだらうが、さういふ良心も全く無い事はなからうけれど、実際は、何とかしてその日その日を飲み暮らせば事足りる酒仙らしいから、この作者に多きを望むのは野暮の骨頂といふ事になる。

下線部を見るに、葛西の作品に親しみを感じた上で好評を下したものだと判断してよかろう。ただし、波線部は、既成の〈葛西像〉を持ち出しつつ、これ以上の期待はするまいという諦めの気持ちを含

[14] 星湖「生麦より」（『読売新聞』大 11.1.3-24）はまた、「今日以後に於て、もし批評が真の価値を発揮するとすれば、それは批評し、指導しようとする意識から成つたものでなくて、創作し、産出しようとする意識から成つたものでなければならない」と予言する。

臺灣大學學術期刊資訊

んだ発言だと受け取られる。この既成の〈葛西像〉について、たとえば『奇蹟』同人の広津和郎は次のように証言している。

> 彼が稀に見る寡作家だつた事は、いはれない事ではない。そしてその寡作の、多くは短篇の、その一行一行が、そんな風にして積み重ねて行つたものである事は、彼の作の一つ一つをよく味はつて見ると合点される。[15]

葛西は貧困に喘ぎつつも軽々しく売文することはなく、一字一句に苦心していた。前述したように、この当時は文学が商品として市場に求められ、小説家の職業化が問題視されはじめる時代であった。葛西善蔵それに対抗しようとする文学者の一人だったのである。このような〈葛西像〉は葛西を取り巻く人々によって発信され、メディアを通してそのイメージはさらに増幅し、ついに定着していったものである。〈葛西像〉の宣伝されることによって、星湖の言うところの「この作者の芸術的良心にすつかり惚れ込んでしまふ」読者が出てきたこともまた事実である。しかし、文学の商品化に対抗する葛西の〈良心〉に注目するだけでは、星湖は物足りなく感じたのだろう。伝聞によるものなのか、想像に基づくものなのかは判然としないが、アルコール依存症に起因する乱れた実生活を送る文学者、すなわち負のイメージとしての〈酒仙〉が、星湖の中での〈葛西像〉として次第に根付きつつあることが星湖の発言から窺われる。それゆえに葛西への期待を撤回するかのような発言をしたのだろう。

三、それぞれの〈期待の地平〉

以上に挙げてきた星湖の月評によって、不満を募らせた葛西は「底を割つての話」をせざるを得なかった。彼は「星湖氏の月評脱線ぶり」で、これまでの批評を「いつの場合でも真面目に聴いて居るつもりだ」と文壇の先輩への敬意を示す。そして「星湖氏のやうな人に言はれた場合は、好悪いづれにしてもよく聴き、言葉は忘れるこ

[15] 広津和郎「作家としての葛西善蔵の一面」(『改造』昭 3.9)。引用は『葛西善蔵全集別巻』(津軽書房、1975.10)による。53 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

とが出来るが、その度に星湖氏と云ふ人のことが新らしく考へ出されて、自分が与へられたゞけの価値を、やはり相手にも求めたい」という気持ちが葛西にはあったという。文芸作品の価値判断は評論家が一方的に決めるのでなく、作品と批評との交流関係の上で築きたいという葛西の願望が「星湖氏の月評脱線ぶり」に表出していると言えよう。つまり、批評行為を経て文学作品としての価値が定まるという、この共同体の仕組みに葛西はよく理解していたのである。葛西は星湖とも、この交流関係を築きたいと願っていたものの、そのような期待を裏切られたと感じたのである。そのため、星湖の批評を「侮辱」として受け止め、「ヘンな侮辱的な調子でやられることは、星湖氏だけに、僕の大いに心外とするところだ」と表明したのである。そして強い口調で反駁を次のように締めくくる。

> 僕の芸術良心云々のことまで、氏として云つて呉れなくてもよさゝうなものではないか。そんなものまで担ぎ出さずにゐられないのだとすると、氏もまた、氏の言葉を借りて云へば、聊か野暮の骨頂に類しはしないか。妄言多罪

星湖にとって葛西に対する批評は芸術良心のみで語り尽くせるものではなかった。その一方で、葛西からすると自分に対する批評に芸術良心を持ち出す必要はなかったのである。一見した限りでは、この作者と評論家との応酬は齟齬を来しているかのようである。しかし「脱線ぶり」という表現が象徴するように、テクスト、そして批評の双方に対する〈期待の地平〉（horizon of expectations）が存在していたからこそ、このようなずれが生じたと言えよう。葛西の「野暮の骨頂」という言葉からは、作者の創作と評論家の価値判断との間の、文学に関わるイデオロギーの構築が未だ完全ではなかったことが読み取れる。ただし、このような不安定な状態こそが文学の生産を促し、進化させる根源的な力なのである。ヤウス（Hans Robert Jauss）『挑発としての文学史』に次のような説明がある。

> 文学の歴史は美的な受容と生産の過程である。この過程は、文学的テクストが、受け入れる読者、反省する批評家、そして自

臺灣大學學術期刊資料庫

分で再び生産していく作家の三者によって現代に活性化されることによって遂行されていく。[16]

これまでの文学史言説に見られる歴史と美学との乖離を解決しようとするために、ヤウスは〈期待の地平〉理論を提出している。この理論ではテクスト受容の役割を果たす読者の存在が再び注目されている。この理論は唯物論的な考え方の不備を鋭く突いたものであるとともに、日本近代文学を考える際にも参照すべきものである。本稿に取り上げる「星湖氏の月評脱線ぶり」をめぐる言説についてであれば、読者でもある評論家の星湖の解釈の重みは作者を悩ませるだけでなく、「暗い部屋にて」の連載が打ち切られるほどに、連載中のテクストに多大な影響を与えている。文壇において評論家は最前線の読者であり、作品の価値を決める言説を生産する人たちなのである。すなわちメディアにおける文芸時評は、このように集団的イデオロギーとして一般の読者に向けても機能しており、テクストの生産者もそれを意識し、挑戦せねばならなかったのである。〈私小説〉も〈期待の地平〉の中から生まれたものと思われる。以上のことは、大正文学史を語るには欠かせない視点だと言えよう。

ここまで見てきたように星湖は月評で各小説を取り上げて論じていくだけではなく、最新の〈話題〉に自らの意見を加え提示している。月評の内容は、星湖自身の関心を反映するものであると同時に、常に流行を追う編輯者の方針に従った結果とも見られる。星湖の言説は、文芸時評の特徴を色濃く映したものと言えるのである。

四、「脱線ぶり」に対する星湖の返答

葛西が『時事新報』の文芸欄で強い不満を公にしたことに対し、星湖は直ちに、しかも真摯に『時事新報』の同欄において返答する。「僕も底を割らう」(『時事新報』大 12.1.30-2.3、5 回)がそれである。ここで真摯にと言ったのは、予備知識がない読者でもその経緯

[16] H.R.ヤウス『挑発としての文学史』(轡田収訳、岩波書店、2001.11) 35 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

や文脈をたどることができるように、星湖はお互いの過去の言説を引用しながら 5 回にわたり事情を説明する形を取るためである。

まず、「暗い部屋にて」の連載中止事件に関する星湖の説明を見よう。一部を以下に引用する。

> あの「暗い部屋」が発表される前の月、君は僕の近所の或料理屋兼旅館へ来てをられて、一と仕事したところで、久し振りで僕を訪問して下すつて、色々の話のなかで「一と月ばかり懸つてやつと二十枚前後の短篇を書いただけです」といふやうな事でもあつた。一字書いては筆を擱き、一行書いては考へるといふ凝り家で有名な君の事だから、さぞ苦心を重ねた結構な作であらうと僕は思ひました。／それから間もなく、その料理屋にちよつと掛り合ひのある僕の知人がやつて来て、君のその料理屋に於ける生活を可なり詳しく僕に話してくれました。それまでは、僕は君の生活を君の作品を通してしか知らなかつたのだが、その時始めて、相当信用の置ける人の口から「酒仙」の面目を遺憾なく発揮した君の生活ぶりを聞く事が出来たのです。

葛西は神奈川県鶴見の料理屋へ逗留し小説の執筆に励んでいたが、同所は星湖宅の近くであった。星湖は葛西の訪問を受け、葛西から一か月の時間をかけて短篇がようやく書けたことを聞き、その新作への期待を膨らませる。ところがその後、葛西の鶴見での生活をよく知る星湖の友人から葛西の近況を詳しく聞かされる。ここではじめて、星湖は葛西の〈酒仙〉の生活ぶりを知ったという。その後、雑誌に掲載された実際の小説を読み、その大きな期待が「すつかり裏切られ」たと感じたと、星湖は述べている。

星湖はなぜ期待が裏切られたと感じたのだろうか。『明治大正文学全集第二十五巻　徳田秋声・葛西善藏篇』（春陽堂、1929.8）所収の「解説」によると、「暗い部屋にて」は「鎌倉建長寺内宝珠院にて前半を執筆し、後半二十枚は鶴見花香園に於いて執筆」[17]されたもの

[17] 『明治大正文学全集第二十五巻　徳田秋声・葛西善藏篇』（春陽堂、1929.8）652 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

である。葛西は金策のため鎌倉の宝珠院での下宿生活から離れ、作品の完成を目指して執筆に集中できる環境を求めて鶴見に移った。そして鶴見で 20 枚分を辛うじて書き上げたのである。このことを聞かされた星湖は、葛西の新作に対して「結構な作」であろうという期待を先入観として持ったに違いない。その後、第三者によって語られた葛西の〈酒仙〉の生活ぶりもテクストの外部情報として星湖の元に届けられる。なお、この第三者の話には、葛西の周辺人物が葛西をどう見ていたかを伝える部分がある。

> 「ところが、婆さん馬鹿ですよ、葛西さんのやうなのが本当の名人といふのだらう、と言つてすつかり感服してゐるんです。」／さう言つて話し手は笑つてゐました。

この「婆さん」とは葛西が泊まった料理屋の女主人のことで、文学者葛西に敬意を持っていたという。星湖の友人は「婆さん」の見立てを「馬鹿」だと嘲笑したのに対して、星湖は「まあ、仕方がない、多少は他人に迷惑を掛けても、妻子を淋しさに泣かせても、それに値するやうな傑作を書いてくれさへすれば」よい、と肯定的に述べる。星湖は芸術のために生活を犠牲にすることはやむを得ないことと考えていたのだろう。そのため、周りの人間に与えた犠牲や、葛西自身の苦心を斟酌したことで星湖の期待がさらに拡大したことは、想像に難くない。しかし、上梓された「暗い部屋にて」は、星湖の見込みを大きく外れたものであったため、星湖は「「出鱈目の作」を罵倒せずにはゐられない至極ゾンザイな物」と判断したのである。そして、星湖は怒りの矛先を雑誌の編輯にも向けたのだと、「僕も底を割らう」で説明している。

同時代評を参照すれば星湖の失望が見当違いなものではないことはわかる。江口渙「十月文壇月評」(『読売新聞』大 9.10.2-10.11) には次のような「暗い部屋にて」への批判が見られる。

> 葛西善蔵君の「暗い部屋にて」(解放) を読んで、私はほんとうに一寸驚いた位だ。あまりに無茶苦茶だからである。「一体これは何を書かうとしたものだ」と真顔になつて作者に質問す

臺灣大學學術期刊資料庫

るよりも、「何でも彼でも近所隣にころがつてゐる物を寄せ集めて来て、小説の中へ叩き込んだだらう」と云ふ方が当たつてゐる。叩き込まれた奴こそ全く好い災難だ。同時にそれを読まされる読者も、矢張同じ程度に災難だ。[18]

江口渙は、小説に描かれた事柄があまりも雑然としており、しかもそれは明らかに作家自身の生活から取材したものだったために、周りの人間にとっても迷惑なことであると批判する。さらに、作品を読まされる読者にとっても「災難」だと強く難じる。また、『新文芸』に掲載された「文壇短評」にも「唾棄す。この作の主人公『私』に前掲の『土方部屋』を読ましたい。『子を連れて』時代に立ち帰つてほしい」[19]という厳しい批判が見られる。

ここまで述べてきたように、星湖が「暗い部屋にて」に低い評価を与えた理由は、テクスト自体の質の低さに基づくものである。また、星湖は作品に対して高い期待を寄せていたために、質の低いテクストを目の当たりにした際には裏切られたと感じたことであろう。このようなことがきっかけとなって、星湖は批評の言説を生産する以外の行動に移ったのである。「僕も底を割らう」では、星湖は葛西旧作「子を連れて」などを読んで感心し、それが掲載される以前から『時事新報』の編輯に批評対象として取り上げるよう促しておいたことを語っている。それ以来、「子を連れて」に類する、あるいはそれを上回る作品を期待していたのだと星湖は明かしている。

残念ながら連載の中止により「暗い部屋にて」は未完に終わったため、葛西の考えたテクストの全貌を論じることは不可能である。ただし、このテクストの生産・受容過程に関わった星湖の批評や行動を見ると、テクストの生成について次のようなことがわかる。テクストにおける方法的な問題は、テクストの内部に限定すると考えがちである。しかし、小説の内容が作家の生活に密接に絡むことで、

[18] 江口渙「十月文壇月評〔四〕」(『読売新聞』大 9.10.6)
[19] K「文壇短評」(『新文芸』大 9.11)。引用は『文芸時評大系大正篇第八巻』(ゆまに書房、2006.10)による。600 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

その方法的な問題はテクストの生産者に深く関わってくるのである。前述した江口渙の批評にも、テクストの内部から外部まで論じる仕組みが見られる。かくして、批評家は芸術至上主義の実践者に確かな敬意を払いながらも、それに付随する様々な犠牲が視野に入ってきたことにより、批評家の〈期待の地平〉も変動したのである。

そのような読み方に対して、葛西は「何故作品の批評以外のヘンなものを、他を侮辱するやうな口吻のものを、氏の地位として、附け加へなければならぬのだらうか」と、「星湖氏の月評脱線ぶり」で憤懣を示した。対する星湖は次のような質問を葛西に投げ返している。

> 葛西君、君の作は、すべてとは言はないが、僕の問題にした物は大方「私」小説です。作者と主人公とが同一です。「本来の面目」然り「おせい」然り、「歳晩」然りです。作品の批評をする事は直ちに作者を批評する事になる。それの善い悪いは知らぬが君が「私はしかじかの生活を送つてゐる」と書いてゐるのを見て、多少は君の実生活をも知つてゐる僕が、作品としてばかりでなく、君の生活記録として君自身へ肉薄して行つたつて、それは脱線でなくて、当然な話ではありませんか？

価値判断がテクスト外部の事柄によって左右されるのを嫌う作者と、作品の批評は作者の批評に直結するのは仕方ないことと見る評論家。葛西と星湖はこのようにして新聞の文芸欄で応酬を繰り広げることになったのである。

五、葛西善蔵の苦境

争論の全貌を理解するために、葛西の置かれている状況をもう少し深く掘り下げよう。ここでは江口渙の葛西評を手がかりにして考察を進めてみる。「新早稲田派の人々」（『新潮』大 8.2）で江口は新早稲田派は「多士済済」であるとするが、「今のところ何と云つても葛西善蔵君をその第一人に推さゞるを得ない」と述べてから、次のような説明を加える。

臺灣大學學術期刊資料庫

> 作品の量から云へば葛西君などその最も少い部分に属する作家かも知れない。然しその質から云へば葛西君は唯に新早稲田派の第一人であるばかりでなく、現代の日本文壇の何処へ出しても決して恥しからぬ作家である。[20]

江口は葛西のことを、寡作ではあるが同じ新早稲田派の谷崎精二や広津和郎などに比べても質的によい作品を世に送り出した作家だと見ている。「殊に重苦しい物資生活のために無残に押し潰された人間の苦しみに対して少しもまじろぎを見せずにその苦悩の種々相を掴み出して要所要所だけを簡潔的表現する点」を江口は高く評価する。社会主義へ傾斜しつつある江口ならではの、葛西文学に対する理解と言えよう。江口の評価は星湖に似通ったところがある。彼もこのような評価を従来の作品に与えていたからこそ、前述したように、素材を客観的に取り扱うことすらできていない新作に対して失望したのである。それがメディアを通して不評の言説として広まり、執筆に難航していた葛西をさらに苛立たせてしまったのである。

大正 12 年 2 月 2 日付の川崎備寛宛の手紙に、「星湖氏の月評脱線ぶり」を書いた葛西自身の心境への言及がある。

> 星湖氏への一文聊藪蛇の感で、昨今解放へ何か書かうと思つてゐるのだが書くことがなくて閉口してゐる場合、日々の長文にはかなり当てられてゐます。要するに、つまらないやうなことで案外人が迷惑を受けてゐることもあると云ふことを星湖氏に一寸注意したいと云ふだけの趣意だつたのですが、まだだいぶ勘違ひがあるやうだからもう一度簡単に書かうか、つまらないからよさうかと、目下考へたりしてゐますが、何しろシツコイのと、全体としての物の感じ方に僕とは違つたところがある気がして、面倒臭い気がしてゐます。[21]

[20] 江口渙「新早稲田派の人々」(『新潮』大 8.2)。引用は注 15 掲書による。457-463 頁。
[21] 注 2 掲『葛西善蔵全集第三巻』776 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

葛西は書簡の中で、作品がうまく書けない状態を、しばしば「閉口」という表現で表している。上記の書簡によると、葛西は星湖の批評に長く心理的に影響を受け、その状況を星湖に訴えようと思い、『時事新報』に寄稿したという。それから、星湖の同紙での返事を読むと、星湖の返事には「勘違ひがある」と思い、再度弁明するか否か悩んでいた。先輩である星湖の真面目な答弁を、葛西は却ってしつこく感じたという。葛西は、作者である自らと、批評家である星湖の「物の感じ方」が異なっていることを改めて認識したのである。この「物の感じ方」の相異は、四章で検討したように、テクスト外部の事柄が作品の価値判断に干渉してしまうという問題に由来したものである。当時の文壇共同体がもつ特殊な性質から見ても、文学言説を媒介するメディアの態度から見ても、このようなことが発生することは仕方のないことと言えよう。

葛西はメディアを通して不本意な評価を受けたものの、独自の文学論を打ち立てて論争を起こそうとはしていない。彼は病気と貧困に喘いでおり、作品を世に送ることさえもやっとのことであった。当時は近代ジャーナリズムの膨大によってテクストの掲載に困ることは少なかったが、葛西は独自の芸術世界を創出することにしか目を向けていない。大正 12 年 2 月 9 日付の谷崎精二宛の書簡に葛西は「気分もよくなく、作も出来ないので未だに引かゝつてゐるが、いろいろと混乱焦燥の状態だ。惨めな絶望的な気分だ、何を頼りに活きたものだらうか、この狂気的刻々の不安から救はれないものだらうか」[22]と書いている。同年 5 月 31 日付の舟木重雄宛の書簡にも、「二ケ月程前から心身共に病的状態に陥入り、ほとんど閉口してゐる」[23]とある。このような状態にあっては、まとまった小説が書けなくなり、題材も身近なものに傾き、その題材を客観化する余裕もなくなってきたのである。星湖と葛西の争論の数年前、まだ比較的健

[22] 注 2 掲『葛西善蔵全集第三巻』777 頁。
[23] 注 2 掲『葛西善蔵全集第三巻』781 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

康だった頃の葛西は「芸術の深さは即ち観照の深さだ」[24]と述べている。彼は最初から題材と距離を置くことを諦めて、私小説の方法に没頭していたわけではなかった[25]。後代に生きる我々が葛西の生涯を俯瞰すると、現実生活の困難が葛西の芸術の可能性を萎縮させたというような結論に達しがちではある。しかし、それではやはり当時の実態や作品の置かれた文脈を見逃してしまうことになりかねない。星湖のような評論家によって構築された〈期待の地平〉が、葛西の芸術世界の創造に関与していたのである。

六、結びにかえて

葛西が星湖の月評を「脱線ぶり」と批判するに至った事件を理解するために、星湖の葛西評や弁明などの言説を見てきた。あえて小説の外部に発生した言説に限定することで、評論家の存在がテクストの生産・受容過程に大きく関わる要素だったことを実証的に検討した。大正後期に私小説が流行したことも、テクストの生産者の意思のみによるのでなく、批評の言説や編輯者の意向が何らかの形で関与していたと考える。その時代の新しい文学に対するイデオロギーは、そのような言説が累積することで修正されたり形成されたりする。読者が文芸時評の役割を意識していたか否かに関わらず、メディアはその権威の確立に加担していたのである。

大澤聡『定本批評メディア論―戦前期日本の論壇と文壇』(岩波書店、2024. 1）には、日本近代文学における文芸時評について、次のように簡潔にまとめている。

---

[24] 大正 8 年 10 月 27 日（推定）で柴田紫香子宛書簡。注 2 掲『葛西善蔵全集第三巻』738 頁。

[25] 引用した書簡だけではなく、神谷忠孝は、葛西善蔵は最初から私小説作家だったという論理に反対している。神谷氏は「馬糞石」(『新小説』大 8.7)、「千人風呂」(『解放』大 9.4）と「暗い部屋にて」などを取り上げ、「物語性の強い内容であり、これらの作品を考察することで、善蔵の意図をさぐり、時代とのかかわりの中で善蔵が物語性を放棄していった過程」を検討すべきだと指摘している。神谷忠孝注 10 掲書、58-59 頁。

臺灣大學圖書館期刊系統

> 文芸時評は明治後期、一九〇〇年前後に誕生した。早々に形状を整えて定着していく。新作の内容紹介と価値判断を主要な責務とする。担当者には反射能力が問われた（速報性の優先）。評定によって、反応や承認に飢えた作家たちを一喜一憂させる（名誉などの象徴的報酬）。のみならず、作家の行く末をも現実的に左右する（生殺与奪権の掌握）。おのずと権威機関と化した。[26]

星湖は1910年頃に登場して以来、恩師島村抱月の世話で『早稲田文学』で時評を書き始め、評論家としての活動を開始している。星湖もまた、葛西をはじめとした作家たちを一喜一憂させ、その行く末を左右する権威の一角を担っていたのである。星湖の批評の核心的なものは何なのか。また、どのような思想的変化があったのか。一方、葛西善蔵の作家像の形成において、メディアがどのように関与していたのか。それがまた葛西の行動と芸術にどのような影響を与えたのか。本稿ではこれらを論じきれないが、この二人の文学者に関する事柄に限っても、時代背景を踏まえて探求すべき課題がまだ残っている。それを今後の課題としたい。

【付記】引用は原則として漢字は通行の字体に改め、仮名遣いは原文のままとし、改行は「／」で示し、ルビは適宜略した。年号の表記は日本近代文学の研究のため、基本的に元号を用いたが、参考文献によっては西暦のみを用いた場合もある。

本稿は第3回台湾大学・京都大学人文科学研究会で口頭発表した「葛西善蔵「星湖氏の月評脱線ぶり」について」を基に大幅に改稿したものである。口頭発表及び論文審査の際に貴重なご意見をくださった先生方に深く御礼を申し上げる。なお、本稿は國科會專題研究計画「中村星湖與葛西善藏：日本大正時期的「角色原型」問題」

[26] 大澤聡『定本批評メディア論—戦前期日本の論壇と文壇』(岩波書店、2024.1) 97頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

（NSTC112-2410-H-002-250-）並びに国立台湾大学高等教育深耕計画–新進教師専題研究計画（NTU-RPG-113L7325）による研究成果の一部である。

【テクスト】（年代順）

中村星湖（1920）「月評」『読売新聞』
中村星湖（1921）「最近小説界の傾向―特にその職業化に就いて」『読売新聞』
中村星湖（1922）「生麦より」『読売新聞』
中村星湖（1923）「新年の創作」『読売新聞』
中村星湖（1923）「僕も底を割らう」『時事新報』
葛西善蔵（1975）『葛西善蔵全集第三巻』津軽書房

【参考文献】（年代順）

田中純（1919）「文壇の現状を論ず」『太陽』
江口渙（1920）「十月文壇月評」『読売新聞』
村松正俊（1920）「似而非現実主義に囚はれたる現文壇」『読売新聞』
岡康雄ら（1929）「解説」『明治大正文学全集第二十五巻徳田秋声・葛西善藏篇』春陽堂
久保田芳太郎（1972）「補注（鴎外をめぐる批評）」川副国基ら編『近代評論集I』角川書店
江口渙（1975）「新早稲田派の人々」『葛西善蔵全集別巻』津軽書房
広津和郎（1975）「作家としての葛西善蔵の一面」『葛西善蔵全集別巻』津軽書房
谷崎精二（1990）『近代作家研究叢書 93　放浪の作家　葛西善蔵評伝』日本図書センター
神谷忠孝（1992）『葛西善蔵論　雪をんなの美学』響文社
紅野敏郎編（1998）「中村星湖年譜」『精選中村星湖集』早稲田大学出版部
H.R.ヤウス（2001）『挑発としての文学史』轡田収訳、岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫

K（2006）「文壇短評」『文芸時評大系大正篇第八巻』ゆまに書房
山本芳明（2007）「メディアの中の〈私小説作家〉―葛西善蔵の場合」『人文』5、学習院大学人文科学研究所
藤井淑禎（2021）「大衆文学の成立―通俗小説の動向として」筒井清忠編『大正史講義【文化篇】』 筑摩書房
大澤聡（2024）『定本批評メディア論―戦前期日本の論壇と文壇』岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫